

Heriberto Ruiz Tafoya,

Packaged Food, Packaged Life: Corporate Food in Metro Manila Slums.

Kyoto University Press, Ateneo de Manila University Press, 2023, xxvi + 418pp.

しら いし なつこ
白石 奈津子

I はじめに

中所得国における超加工食品 (Ultra-Processed Food) の市場規模は、コロナ禍の都市封鎖などを経て拡大の一途を辿っており、高脂肪・高糖質・低食物繊維の食事がもたらす健康被害に対する懸念は広がっている。本書が対象とするフィリピンにおいても、1980年代以降の製造業の進歩、自由貿易の促進、物流の変化、マーケティングツールの高度化などによって、工業製品の加工食品の消費は、階級や地域を問わず急速に拡大し続けている。同国における食の質の急激な変化は、人々の生活の質の改善を上回る速度かつ極めて深刻なレベルで生じている [中西 2020]。

本書が中心的に取り扱う、企業生産による包装食品 (Corporate packaged food: 以下, CPF) とは、企業ロゴやブランド名が印象的な形でラベリングされ、個包装された工業製品の食料や飲料を指す (p.xxi)。フィリピンのローカルな日常に足を踏み入れたことのある者にとって、そのような CPF が所狭しと並ぶ小規模小売店 (以下, サリサリストア) や、日々提供されるインスタントコーヒーやジュース飲料、災害等での定番支援物資として配布されるインスタント麺や缶詰、そしてそれらを消費するスラムの過密した居住環境などは、ある種見慣れた光景であると同時に、一度はそのあり方に疑問を抱いたことのあるものではないだろうか。本書は、そんなマニラのスラムをおもな調査地としながら、CPF

に依存した食のあり方がさまざまな健康被害をもたらすだけでなく、人々の豊かな生の実現を根本から阻害していることを論じる。本稿では、フィールドベース (地方農村) のフィリピン地域研究に携わってきた評者の立場から、本書の意義と問題点について論じたい。

II 本書の概要

本書は、4つの部から構成される。まず第1部「CPFの消費」では、ブランド食品がマニラの富裕層からスラム世帯へと浸透していく歴史的過程 (1章) が整理されたのち、現代の CPF 消費に関する状況が、統計情報やエスノグラフィックな調査データから示される (2章, 3章)。通常、人々が CPF を嗜好する理由は、経済的な事情や利便性、食や健康に対する知識不足といった観点から理解されることが多い。それに対し著者は、人々が自然由来の調味料や食材では出すことのできない味や香りを求めて CPF を消費していることにも言及しつつ、その消費と依存をめぐる問題が、より強固な歴史的・構造的制限から生じていることを強調する。

続く第2部「CPFの交換」では、CPF が貧困世帯の手に届くまでの流過程が整理される。膨大な量の CPF は、サリサリストア、市場、スーパーだけでなく、企業と直接取引を行うエージェント (Distribution Partner) の手を通じて、また *Tingtingi* (ひとつずつ) と呼ばれる小分けの販売単位や、顔の知れた間柄での掛け買いを用いて、購買能力の限定された最貧困層の元にまで届けられる (4章)。また、CPF の流通において重要となるのは、そうした市場を介した交換だけではない。CPF はさまざまな社会的・政治的アクターからの贈り物 (貧困援助、災害時の支援物資) としても人々の日常に浸透しており (5章)、近年はコロナ禍における都市封鎖の際の支援物資としても重要な役割を果たした (6章)。

こうした都市封鎖の間、食品企業は都市のあらゆる場所に展開するサリサリストアを通じて CPF の安定的供給 (食の安定供給) を実現させた。他方、その一連の動きのなか、CPF を製造する大手食品企業は、サリサリストアをその完全なる管理下において活用すること、つまり「人々が外に出なくても

食べ物が家に届く（完結した）生活」を実現、強化することへの意欲をのぞかせている。このような特定の空間で完結できる／してしまう生のあり方は、著者が「パッケージ化された生（Packaged life）」と呼ぶものの一部を構成する。パッケージ化された生とは本書の議論を貫く重要な概念であり、さまざまな精神的・身体的制約によって「良く生きること」から疎外された状態の生を指す。具体的には、スラムでの制限された居住空間、自然からの切り離し、手段の欠如（土地、水、技術へのアクセス、調理用の新鮮な食材、エネルギー、食品を保存するための器具などの欠如）、大企業の製品と広告に囲まれ情動さえもが方向づけられた生活などが、パッケージ化された生を構成するものとして示される。

第3部「パッケージ化された生」では、このような現象が、CPFの生産、流通、消費によって情動的・身体的に形作られるプロセスが論じられる。都市住民は自然景観から徐々に切り離されるだけでなく、それと並行する形で生じる消費習慣の変化、すなわち自らの消費する食料を調理するような能力の喪失（Food Deskilling）を経験している（7章）。この二重の分離と変容は、急激な変化としてではなく、徐々に人々の間に浸透し、生命エネルギー「ギンハワ（*Ginhawa*、詳細は後述）」を蝕むプロセスとして進行している（8章）。

第4部（9章）「生を解きほぐす」では、このようなパッケージ化された生を解放する方途について、ラテンアメリカの先住民概念「ブエン・ヴィヴィール（*Buen Vivir*、満ち足りた生）」、フィリピンにおける食・食材とのかかわり方の哲学（キニラウの哲学 *Kinilaw Philosophy*）、心身を総体的にとらえる生命エネルギー（ギンハワ）という3つの概念から検討する。結論では9章の議論をふまえた上で、CPFの消費から派生する生活様式の批判を越え、都市貧困地域における尊厳ある食のあり方（食をめぐる知、実践、草の根レベルでの空間共有、自然との触れ合い、災害備蓄体制におけるCPF依存からの脱却、中小農家や地元生産者の農産物消費）が提案される。

Ⅲ 本書の意義と課題

本書の意義のひとつは、人々の食実践に関するそ

の詳細なデータにある。マニラの食に関する研究としては、これまでも Doeppers [2016] による食流通の史的 research などがあったが、それはあくまで食料供給を維持してきた社会的営みに着目した議論であり、人々の「調理し、食べる」という日常行為そのものが、本書のようにまとまった形で学術的議論の対象とされることはなかった。本書が描くのは極めて日常の光景であり、現地での調査や生活経験のあるものからすれば、必ずしもそれ自体として斬新な記述となっているわけではない。しかしそれらを徹底して集約し、人々の「食べる」という行為を成り立たせる複合的な要因とその過程から論じることで、本書の記述は興行きをもったものとなっている。その意味で、本書は人々の食をめぐる営みに関する資料的価値をもつものとなるだろう。

本書の意義としてとくに重要なのは、土地や住宅などの空間、社会正義、民主化などの問題に焦点を当てることが多かったマニラの都市政治研究に、食と身体という新たな視点を導入した点にある。著者は、1986年のエドサ革命の祝祭的雰囲気を支えた多様な食についての人々の記憶を辿りながら「日頃から CPF を食べる人々が、今、大規模な社会政治運動を構築することは可能なのか？」(p.62) という問いを投げかける。エドサ革命を経てもなお温存され続けたさまざまな社会政治的問題は、現在に至るまで人々の生の「パッケージ化」を推し進める。近年のフィリピンでは、新自由主義的な自己責任論や、人々の生や親密性の領域への国家の介入といった生政治の問題が注目を集めるが、その議論の多くは、誰かのための自己犠牲や他者へのケアといった関係論、アイデンティティや主体のあり様への着目に軸足がおかれている [関 2017; Jensen 2022]。これに対し、本書が投げかけるのは、抵抗する身体そのものが消費をとおして蝕まれ「パッケージ化」されているときに、彼らはいかなる意味で自由になることができるのかという問いである。こういった着眼は、身体を維持する営みの根幹的部分が囲い込まれていくことに対する警鐘を、マニラの生政治の議論に取り込む^(註1)。

また、囲い込みと固定化という意味での「パッケージ化」という概念の汎用可能性についても、本書の意義として指摘したい。たとえば芝宮 [2023] は、フィリピンの災害資本主義的な復興開発で乱用される

「レジリエンス」の概念に着目して、それが人々の経験と応答のあり方を一定の意味に固定化し、抵抗の余地を狭める形で流布していることを指摘する。芝宮の指摘するこの現象は、生の選択の狭い範囲への固定化（パッケージ化）であると同時に、レジリエンスという概念のパッケージ化でもある。この例のように、人々の生を囲い込もうとするパッケージ化の権力はさまざまな形で展開されている。生政治をめぐる議論への注目が高いフィリピン研究においてはとくに、本書の視点を共有できる事例は数多くあるだろう。本書の議論は、そういった関連する問題系への着目と接続を明瞭にすることが期待される。

以上のように、本書はフィリピン地域研究において新たな研究領域への着目と展開という重要な意義をもつが、最後に、本書におけるローカルな概念（ブエン・ヴィヴィール、ギンハワなど）を用いた分析について、方法論的な問題点を指摘したい。

まず、著者が本書の議論の基盤として用いているブエン・ヴィヴィールという概念は、自然との調和、物質と精神のバランスを共同性と多元性のもとに実現する生のあり方を示す、ラテンアメリカの先住民コミュニティ由来の概念である。これは、ポスト開発主義、ポスト人間中心主義の時代において、生のオルタナティブを投げかける重要な概念として注目される [Acosta and Abarca 2018]。一方のギンハワとは、(臓器とともに)「身体の内部に存在し、深い呼吸によって現れる生命エネルギー」(p.238)を意味する古セブアノ語(フィリピン諸語のひとつ)の概念として、本書では用いられる。魂のような概念にも通じる側面をもつものの、本質的には精神と身体との二元論に分割することのできない概念として定義される [Mercado 1991, 291, 300]。このような整理の上で、著者はギンハワ的な自然に結びついた生とそれを支える生命エネルギーを、素材そのものに寄り添ったローカルな調理の手法と哲学(キニラウの哲学)から回復させるといって、食と身体の循環を論じる。ブエン・ヴィヴィールが現代の企業化された食料制度とそれを支える資本主義システムを批判する、倫理的・政治的な枠組みであるのに対し、こうしたフィリピンのローカル概念は、その原則を個々の生と具体的日常生活のレベルに落とし込むものであると著者は論じる。

このように、本書のなかでギンハワは「生そのも

のと生命エネルギー」という古セブアノ語の意味で用いられるが、本書の調査地マニラでおもに話されるタガログ語/フィリピン語の場合、同じ *ginhawa* という単語は、心身の苦痛や制限からの「解放」を意味する。著者も、ギンハワという概念についてインフォーマントが真っ先に説明したのは「安堵や苦痛からの解放」と「それに象徴される快適な生という意味」だったとしながらも、その語がもつ「物質的に満ち足りた状態(満腹)」という側面に注目して論を展開していく (p.237-238)。そして、そこから「食と身体は(調査地の実践でも)ギンハワの概念に結びついている」(p.240)として、生命エネルギーをめぐる存在論的なギンハワの議論に結びつけていく。このように、古セブアノ語概念独自の意味だったはずのものを異なる言語実践の内に見出していく筆者の論述は、評者の目にはブエン・ヴィヴィールの心身をめぐ(外來の)規範論的議論を強固な前提として展開されているように感じられてならない^(注2)。

セブアノ語のギンハワに相当するような、二元論的理解に適合しない精神と身体のある方を指し示す概念は、フィリピン諸語のなかに共通して存在する [Mercado 1991]。その意味で、本書が、現代の食実践に対する「理想的オルタナティブ」として、ギンハワのような心身をめぐ(る)る概念を提示したこと自体の意義を否定するわけでは決してない。また、そうしたオルタナティブの模索は人文学の普遍的テーマであり、ローカル概念にその可能性を見出して論じることは、地域研究が頻繁に用いる手法でもある。他方で、ここで指摘したように、その概念がどれほど生きた社会のなかで用いられているのか、概念をめぐる実践が人々に内在するものとして立ち現れているのかについては、やはり立ち止まって慎重に検討する必要があるのではないかと(自戒も込めて論じるが、これはある種の調査倫理の問題にも思える)。人々は、実際にどのような概念を用いて食と心身とのつながりを捉え、実践しているのか。たとえば、本書のデータでいえば、心身の解放というタガログ語のギンハワの概念から展開できる議論もあったように思われる。そのような観点からの踏み込んだ調査や分析があれば、本書が結論として提示する「良き生」をめぐる草の根からの議論や、公的領域と私的領域をつなぐ媒体としての食とその政治をめぐる

議論は、より説得力をもった豊かなものになっただろう。

近年、東南アジアでは有機農産物市場の拡大にみられるように、よりよい食と心身の健康への関心が中間層を中心に高まっている。また農業を、農村における階級闘争の問題としてだけ考える時代はすでに終わりを告げ、都市空間の隙間を利用した自給生産や生産過程での交流をとおした新たな価値創造の契機として食農をとらえるような多様な実践も報告されている [Saguin 2020]。そうしたなかで、本書の提示した食と心身のあり方をめぐる議論や、「良き生」を阻害するパッケージ化という概念を応用して検討すべき問題は、ますます重要かつ多様になっていくだろう。本書は、そのような今後発展の望まれるフィリピンの食と人々の生、社会的な選択をめぐる議論に着手する際の、重要な必読書になるといえる。

(注1) このような批判的視点は、序文にも書かれている著者自身の経験に由来する。メキシコのスラムエリアで生まれ育った著者は、1992年のNAFTA（北米自由貿易協定）がメキシコにもたらした食の貧困、健康被害、人生の選択の制限が、政治的存在としての人々の生を根本的に不可能たらしめる様を目撃してきた。そうしたメキシコの経験を、他の地域における人々の生をめぐる問題に拡張させることは、著者にとって本書の重要な目的だったといえよう。

(注2) 本書でも、調査地の人々は、CPFの消費によって苦痛（空腹）から解放される（ギンハワ）と語ることが示されている。しかし著者は、その意味での「ギンハワ」が最終的に健康被害とそれによる苦痛に満ちた死を人々にもたらすという点に着目して、人々の行いは（タガログ語的）ギンハワをもとめて、むしろ（古セブアノ的）ギンハワから離れる矛盾したものになっていると論じる。こうした意味で、本書における「ギンハワ」の議論は、内在的な実践からの立ち上げというよりも、規範的概念提示を優先したものになっているように思われる。

文献リスト

〈日本語文献〉

芝宮尚樹 2023. 「現代フィリピンにおける気候変動の経験と応答についての一考察——スーパー台風ヨランダ後の文学アンソロジー Agam にみるレジリエンスの生政治への抵抗——」『アジア・アフリカ地域研究』23(1)(9月): 65-95.

関恒樹 2017. 『「社会的なもの」の人類学——フィリピンのグローバル化と開発にみるつながりの諸相——』明石書店.

中西徹 2020. 「現代経済の『錬金術』と有機農業——フィリピンにおける『食』と『貧困』——」『東洋文化』(Oriental culture) 100(3月): 125-174.

〈英語文献〉

Acosta, A. and M. M. Abarca. 2018. "Buen Vivir: An Alternative Perspective from the Peoples of the Global South to the Crisis of Capitalist Modernity." in *The Climate Crisis: South African and Global Democratic Eco-Socialist Alternatives*. ed. V. Satgar. Johannesburg: Wits University Press.

Doeppers, Daniel F. 2016. *Feeding Manila in Peace and War, 1850-1945*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

Jensen, Steffen Bo, Karl Hapal and Vincente L. Rafael 2022. *Communal Intimacy and the Violence of Politics: Understanding the War on Drugs in Bagong Silang, Philippines*. Southeast Asia Program Publications, an Imprint of Cornell University Press.

Mercado, Leonardo N. 1991. "Soul and Spirit in Filipino Thought." *Philippine Studies* 39(3): 287-302.

Saguin, Kristian 2020. "Cultivating Beneficiary Citizenship in Urban Community Gardens in Metro Manila." *Urban Studies* 57(16): 3315-3330.

(大阪大学大学院人文学研究科講師)